

生品神社 神楽殿の下座について

(所在地 太田市新田市野井町1972)

社殿に向かい参道を進み、朱色に塗られた大鳥居から数えて三つ目の鳥居を潜ると、左側にあるのが神楽殿(写真1)である。木造平屋建て入母屋造り銅板葺きで、氏子中の古老によれば、新田公舉兵六百年祭(昭和8年開催)の時に造ったものという。

それ以前には、参道を挟んだ向かい側あたりに旧神楽殿があり、拝殿(明治43年建造)と同じ頃に造ったものであつ

たが解体してしまつたという。しかし、現神楽殿を詳細に観察すると、両妻側の虹梁に渦巻きや若葉模様の線彫りが認められることから、旧神楽殿の材木を一部使用したものと考ええる。

旧神楽殿では、昭和の初め頃まで地芝居を舞つたというが、現神楽殿では一度もなく、歌謡や



写真1 神楽殿 外観



写真2 下座

踊りなどの演芸を楽しむ程度という。

ところで、社務所の北にある宝物殿の内部を調べたところ、組み立て式の「下座」が納められていることを発見した。下座とは、地芝居（村歌舞伎）を上演する際に、舞台上に接して左右の外側に設ける装置であり、義太夫の演奏場所の前に置かれたものを「チヨボ下座（又は謡い下座）」、三味線などのお囃子の前に置かれたものを「お囃子下座（三味線下座）」と称す。互いに対称形を成して置かれる。

下座を宝物殿から運び出し、限られた時間の中で不完全ながらも、仮りに並べたのが写真2である。部材の数から判断して一対の下座が納められているようである。柱間は5尺1寸となり、柱間中央に繊細な縦格子戸を嵌め、その両側に鯉が滝を昇る様を高肉透かし彫りした小壁板を嵌め込む。柱の外側には、龍と雲を高肉透かし彫りとした脇障子を備える。

このように、当社社で保存する下座は不完全な仮置きでの確認ながらも、随所に高肉透かし彫りをした彫刻が施される豪華な造りの下座となっていることが認められ大変貴重である。今後は本格的に組み立て、制作年代の考察も含めた下座の全貌を明らかにすることが求められる。さらに、適切な修理の上、永久に保存することが妥当であると考える。

（群文研乾幹事・金井淑幸）

参考文献

桑原稔著 『新川の歌舞伎舞台下座について』
ビエネス第2号 平成8年3月6日発行
桑原稔著 『豊田市の農村舞台』
豊田市教育委員会発行 平成3年3月30日



舞台と下座との関係図